
異世界は意外と身近でした。

つりめねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界は以外と身近でした。

【Nコード】

N 6 4 7 9 Z

【作者名】

つりめねこ

【あらすじ】

いつもの通りの日々を暮らす女子大学生の鈴城 瑠依^{すずしろ るい}。彼女はいわゆる普通の女子大学生。「魔法やら戦争やら、それはその次元の話だよ。」

ある日、彼女は日課の古本巡りをしていた。そこにあった魔法の本、
”封穴のグリモア”。
”空白を埋める者、その名を告げよ・・・”その本に名前を書いた時から、彼女の物語は始まった。

「そう始まって、終わった。・・・はずだったんだけどなあ？」

*基本的にノリ、で書いている時があります。初心者丸出しな小説ですが、頑張っ書いていきたいと思ひます。

只今、FF7の世界に突入中です。しばらくFFの世界だと思ひます。

プロローグ（前書き）

はじめまして、つりめねこです。小説は初めてですが、宜しく願います。

よくある異世界トリップで、所々原作沿い、スルー、オリジナル要素等あります。

つまり、ネタバレもあります。

主観で書いている点もあるので、そこはご了承ください。
では！

プロローグ

魔法の本、”封穴のグリモア”。

本に書かれた、ある一文……。 ”空白を埋める者、その名を告げよ・

・”

その本に名前を書いた者は、物語をつづらなければならない。

日々の生活、事件、事故、会った人、話した人……。

そのすべての出来事が本に”生きた証”としてつづられる。

その本が、全部埋まったその時、 ”封穴のグリモア” は力を発揮する。

その力は、ある強大な災厄を塞ぐ為の力だった。

その力で、彼はその世界を救った。

役目を終えた”グリモア” は、彼の手元から姿を消した。

まるで、次の所有者を見つけるように……。

「 ”封穴のグリモア” ……。ファンタジー小説かな？」

プロローグ（後書き）

「封穴のグリモア」

FFTA2の主人公が異世界に来たきっかけになったものです。
元の世界に戻る為に、彼は文字をつづっていきました。

この小説の主人公もそのノリで行く予定です。

ゝ序章ゝ 空白を埋めし者（前書き）

旅のきっかけの話です。ちょっと長い（細かい）かもしれません
が・・・。

あと、まったりペースで更新します。（キツパリ）

〈序章〉 空白を埋めし者

“空白を埋める者、その名を告げよ・・・”

そんなこと書いてあったらさ、名前、書きちゃうよね？・・・え？私だけ？

~~~~~

大学の講義も終わり、いつもの古本屋へ行く。

それが、私。<sup>すずしろ</sup>鈴城 瑠依<sup>るい</sup>の生活サイクルだった。

特にサークルに入っているわけでもなく、アルバイトもやっているけど、

まあ・・・そこそこ（？）稼いでいる程度という生活をしている。

そこそこのおかげで、いつも赤字ギリギリ。食費を少し削りつつ、古本屋に通っていた。

友達からは「バカじゃないの!？」と言われるが、これが私の癒しなんだからしょうがないでしょ？

そんなことを考えつつ、目的地に着く。裏路地にあるそこは、

その場所だけ時間が止まっているような、アンティークな感じ。・・・

・良く言えば。

まあ、ブツ。オフとはまた違った・・・、雰囲気とか、お宝があり  
そんな感じが良い。

特に掘り出し物なんかあったりすると・・・、やめられない。ほら、  
これとか。

「“封穴のグリモア”・・・ファンタジー小説かな？」

見た目の感じでびびつときた。これを買おう。直感って大切、うん。

「すみません、これ下さい。」

・・・300円。さて、これはアタリかハズレか。



「ありえない」とか言われそうだったのに、何故かすんなりと受け入れてくれた。

“前例があるから”・・・なんだそれ？

私は助けてくれた人物―シドに様々なことを教えてもらった。

この世界、イヴァリースのこと、魔法・剣の世界。

モンスターのこと、そして人間以外の種族がいる、ということ。

そして、その“本”を知っている、ということ。

その後、“乗りかかった船”とかでシドがリーダーを務めているガリー克蘭という、

サークルみたいのに入れさせてもらうことが出来た。

見知らぬ土地では、仲間って本当に大切だと思っただよ、1人は寂しいし。

・・・元の世界に帰ったら友達大切にしよう。

それからしばらくは、自分の身を守る為の力、剣・魔法や体力つくり<sup>クエスト</sup>に励みつつ、仕事をこなしていた。

錬金術というのにも挑戦してみた。

ン・モウ族という種族にしか出来ないものらしいが、何故か出来た。異世界人の特権ってやつにしておこう。

あの本ー、グリモア（今は手帳っぽくなっている）についてもよく知っている人にシドのつてで会うことができた。

分かったのは、

・災厄の為に作られたものだったが、今はその心配はない。

・その本は、人の生きた証を字にして、満杯になったときその力を発揮する。

その力で異世界に渡る事も可能だ、ということ。

あと、何で錬金術を使えたか、については私が“優れし者”だかららしい。

ちなみに、能力は「縁」。うん、抽象的過ぎて分からない。

その後は、ふーんって感じで聞いていたので詳しくは覚えていない（駄目だろう）が、

とりあえず技の継承つてのだけ済ませた。同じクランにいたアデルも優れし者だったとはなあ・・・。

そんな日々を過ごして、手帳いっぱい文字が埋まり、感動のお別れ。

いざ、我が家へ！

・・・と、思ってたのに。

「次の世界も異世界だなんて聞いてない！！！」

確かに、元の世界に戻る。とは言ってなかったけどさあ！！

〈序章〉 空白を埋めし者（後書き）

ちよこつとメモ。

鈴城 瑠依：女子大学生の21歳。1人暮らし。

シド：ガリークランのリーダー。種族はバンガ族

面倒見がとてもよい人。

アデル：ガリークランの一員。種族はヒュム族（いわゆる人間）

自由気まま、世界でも稀な”優れし者”

優れし者：様々な種族の混血により、時たま能力の突出した人間が出てくる。

その能力は様々だが、普通より強いチカラを持っている  
為、

優れし者と呼ばれるようになった。

指摘・感想等ありましたら、宜しく願います。  
しかし、文にするのは難しいです……

## 〈第一章〉 最終幻想の世界（前書き）

やつと他の世界に行けました。

〈注意！〉

\* 勝手な解釈をしています。

\* DCはよく知ってないです、原作を軽くスルー・・・かも。

## 第一章 最終幻想の世界

「……ふう」

以上、回想という名の現実逃避でした。

「帰れると思ったんだけどなあ・・、また異世界。かあ。」

きよろきよろと辺りを見渡す。ゴツゴツとした岩がむき出しの、茶色い光景が広がる。

「・・さて、いつまでも呆けてられないね。まずは・・ファイア！」  
頭の中で呪文を思い浮かべ、手に魔力を込める。するとポツと火がついた。

——なるほど、ここは魔法が使える世界っぽい。

余談だが、魔法には2つの使用方法がある。

1つ目は、大気中に漂うマナを使った方法。

マナを束ねて、魔法を使う祭の燃料とするのだ。

2つ目は、自身の力を使う方法。

自身にマナの代わりとなる、生命エネルギーを使うのである。

余談終了。

「マナがある世界っぽいね、自分のエネルギー使っていないし。」

異世界に行ったときの注意点。

その1、あわてない

その2、目立たない（異質なことをしない）

その3、仲間を作るべし

これは、前回の異世界で学んだことだ。とりあえず、パニックになればなるほど、

周りからは白い目で見られる。ここは冷静に・・

「まずは、人を探そう」

きよろきよろと見渡しながら歩く。方角はコインで決めた。

「ん？あれは・・・剣かな？」

適当に歩いていると、茶色い地面に剣がぐつさり。

土ぼこりや汚れがその剣の年期を示している。

「何か・・・寂しい感じ。何でだろう・・・ああ、そうか。」

岩、岩、砂、砂。

——自然が少ないんだ。

「よっし、何か明るくなれるよーに。」

人の気配・・・特に無し！

頭の中に呪文を浮かべ、魔力を溜める。そして、両手をそつと地面につける。

~~~~~

エンジンの音を大きくさせながら、俺はバイクを走らせていた。

今日はある村ー、あの事件以降に出来た村への荷物運びの仕事だった。

メテオ災厄、セフィロスの復活ー、その後も色々なことがあったが、やっと平和になった。

今だモンスターや、溢れ出たライフストリームで事件や事故が起きるが、

以前に比べたらまだマシ、だろう。

荒野を走りながら、クラウドはそう考えた。

少し高い場所で、休息を取る。

ここからミッドガルまでは、最高速度を出せば2時間あたりで着く。
・・・が

ここまで来たんだ、・・・寄っていくか。

その場所へ行く途中、旅人とすれ違った。

普段なら特に気にしないが、その旅人が妙に記憶に残ったのは、多
分――

「・・・？花・・・？」

荒れた土地にある、地面に刺さった“友”の剣^{もの}。
そこに不自然に咲く花があったからだろう。

~~~~~

剣の場所に別れを告げて、人を探す。

とりあえず、道っばいところに出てみた。商人とかいないかなー？

〈第一章〉 最終幻想の世界（後書き）

まだ対面させる予定は無い！（え  
周り道をしつつ、進んでいきます。

## 〈第二章〉 最終幻想の世界（前書き）

クリスマス・イブ？バイトです。本当に有難うございました。

オリジナル人物が出ます、しばらくは原作キャラは出てこない気がします。

気がするだけなので、変わる可能性もありますが・・・（えでは、どうぞ！

\*ニブルヘイムとミッドガルを勘違いしていました。

うわぁ、失敗したー！ということで、変更しています。すみません！

## 第二章　最終幻想の世界

現状報告、人を見つけることが出来ました。

うん、とりあえずは・・・ね。

あれは、いわゆる襲撃されているという状態だと思うんだけど・・・。

「普通、商品で闘わないよね・・・。」

~~~~~

男は自分の行いを悔いていた。あまりにも軽率だったと。

モンスターや盗賊が出現する区域だったが、武装トラックに乗っていたため

あまり危機感を持っていなかった。が、肝心のトラックが故障してしまい

動けなくなってしまった。

たいした損傷では無い。すぐに修理すれば動くだろう。

だがその時、背後には商品を狙った盗賊団がいたのだ。

「殺せ。」

冷たく呟く声に気がつけたのは、まだ俺は運がよかったのかもしれない。

ざっと見て10人程度、まだ、囲まれてはいない。

嫌な汗を掻きながら、手に持っていたスパナと大きな瓶（中身はオイル）を

大きく振りまわす。・・・が、効果はやはり、ない。

トラックの助手席には武器がある、そこまで行ければ。

男がそう考えていた時、1人の盗賊が肩から血を出しながら倒れた。はっとしてそちらを見ると、黒髪の少女がこちらを見ていた。

たった一言、「手伝います。」と彼女は言った。

~~~~~

“見過ごせない”というお節介と“情報収集——！！”という気持ちがあつたのもあり、

私は一目散に襲撃現場に向かった。

まず、盗賊2人（岩陰に隠れていた）を愛刀（牡丹という）で、左を刺す。

寸分の違い無く心臓を突き刺し、捻って抜き、絶命させる。

以前の私だったら失神するぐらいの血の量と感触を残しつつ、次の目標に狙いをつける。

残り10人、手には皆ナイフや剣を持っている。銃持ちはいないようだ。

襲われている男の人も、この状況に混乱はしていないようだった。ならば、大きく出てもいいかもしれない。

集団の中で一番体格のよい盗賊を、後ろから右肩から切り倒す。

襲われていた男と目が合い、「手伝います。」と自分が敵でないことを伝える。

「誰——」と叫ぶナイフ盗賊を突き飛ばし、迫り来る盗賊どもに備え陣形を取る。

イヴァリースで習得した、範囲技。

「波動撃！」

~~~~~  
「いや、本当に助かったぜ、嬢ちゃん。俺はラクルス。商品の運び屋だ。」

「いえいえ、私はルイ・スズシロです。・・・旅人です。」
男の人は“ラクルス”というらしい。褐色の肌にムキムキの筋肉。豪快そうな人だった。

「旅人か、腕っぷしが強いのも納得だな。」そう言ってラクルスは横目をやる。

ラクルスの隣には、アクセサリー（ネックレス）とマテリアが置いてある。

これは、盗賊から貰ったもの（奪ったもの？）だ。

ルイは盗賊を1人だけ残し、後は全滅させた。

盗賊団が奪ってきた物を全部出させてから逃がした。その戦利品だ。
「おかげで商品も無事だし、なにより命が助かったぜ。気持ちだ、受け取ってくれ」

そういつてマテリアを差し出す、青いそれは光を浴びてキラキラしている。

ルイにはマテリアが何か分かっていない。が、とりあえず貰っておくことにした。

「えっと、有難うございます。大切にします。あ、あの」

ルイは一番聞きたかった情報を聞き出す為、会話を続ける。

「商品を運んでいるってことは、近くに街があるってことですか？」

「ああ、ミッドガルがあるぜ。ここからだ・・・、徒歩だとちっと掛かるが」

「ミッドガル！・・・良かった、方角あっていたんだ。」

「ルイさん、あんたミッドガルに行く予定だったのか？」
「ええ、途中道に迷ってしまつて……。うろつろしていたんですよ」
「そうだったのか、ここは目印が少ないからな……。」
「確かに……。あの良かつたらミッドガルまでの道を教えてくれませんか？」
「ああ、いいぜ。つっても、基本的に道なりに行けばなんとかなるがな」

~~~~~  
ラクルスさんは、ミッドガルまでの道のりを書いた地図、そして何と！

紹介状まで書いてくれました！

旅人にとつてありがたい物ですよ……。有難うございますっ！  
旅人なら路銀を稼ぐのに重宝するだろう、ということで貰った紹介状は、

ラクルスさんが入っている組合みたいなもの、（WROと言つらしい）で

仕事貰える紹介状だった。本当に有難い！

あと、この青い宝石・マテリアって言っていたけど、何だろう。  
あとでさりげなく聞こう。

さて、先ほどの会話で、

1、ミッドガルという街がある。そこまでは徒歩では遠い。

2、目印が少ない。その街近くに村や集落は無い。

と、いうことが分かった。武装トラックで移動する辺り、あまりこの世界の人は

外に出ないのかもしれない。

と、いうことが分かった。

もちろんミッドガル、という場所をルイは知らない。が、あえて知っているようにした。

“相手の常識に合わせて話す。”知らないことは、後で調べる。感の良い人には不審に思われるが・・・その時は正直に話す。結局、他人なので深くつつこまれることは少ないのだ。

「ミッドガル・・・か、どんな街なんだろう？トラックがある辺り、ちよつと故郷っぽいけど・・・。」

ちなみに故郷とは、元の世界、日本のことである。日本ではトラックやバイク・車は当たり前前に闊歩している。が、異世界だとやはり事情は違うらしい。

「イヴァリースは故郷より進んでたっぽいなあ。でも、やっぱり！」  
「チョコボが一番だ！」とガッツポーズを構えた横をバイクが通りすぎる。

「・・・チョコボ？」

これが、彼の第一印象だったということは、口が裂けても言えないだろう。

## 〈第二章〉 最終幻想の世界（後書き）

ちよこつとメモ。

鈴城 瑠依↓ルイ・スズシロ。

武器：刀 牡丹 黒塗りの刀。牡丹の絵が彫つてある。

技：波動撃 剣や刀・拳等の衝撃波を自分中心に放つ技。

ラクルス：商品の運搬屋。豪快な印象を持たせる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479z/>

---

異世界は以外と身近でした。

2011年12月24日12時54分発行